

を越える居住遺跡の広がりにはインダス川中・下流域を中心に 100 万 km²の広さに及び、年代的には、研究者によって多少の差はあるものの、ほぼ紀元前 2600 年から前 1800 年の間に位置づけられている。インダス文字の研究に大きな役割を果たしているアスコ・パルポラ (Asko Parpola) によれば、その成熟期は、前 2550 年から前 1900 年の間とされる。その時代に栄えた重要な都市遺跡として、二大都市モエンジョ・ダーク、ハラッパーの他にも、チャンフダーク (Chanhudaro)、カーリーバンガン (Kalibangan)、ロータル (Lothal) などあげられ、20 世紀末にインドのカッチ湿原で発掘されたドーラヴィーラー (Dholavira) は、二大都市につぐ大きさのものとされる (図 1)。

【文字資料】 文字の記されている資料としては、

- 1) 文字の陰刻された印章
- 2) 印章の捺されたテラコッタ片や土器、あるいは鋳型から作られたテラコッタ、ファイアンス (彩色陶器)、金属片
- 3) そのまま読むように文字が浅く刻まれた凍石、テラコッタ、ファイアンスなどで、様々な形状の細小品
- 4) 線刻された土器
- 5) モエンジョ・ダーク出土の銅小板で、通常、片面に文字、片面に図案の刻まれたもの
- 6) 文字の刻まれた青銅製品
- 7) 文字の刻まれた象牙・獣骨
- 8) ドーラヴィーラーで土中から発見されたもの (図 2)。すなわち木製看板に文字が刻まれ、そこに石膏のようなものが流し込まれていたらしく、木が朽ちはてた後に文字だけが残ったと考えられるもの。10 文字あり、1 文字の大きさは縦約 30 cm。横約 20 cm。

があり、それら遺物全体の数は、今日では 5 千近くにのぼる。しかし、そのうちの 3500 以上はモエンジョ・ダーク、ハラッパー両都市からの出土で、約 300 はロータルとカーリーバンガンの出土である。メソポタミアなど、インド亜大陸外の出土品も存在する。

それらの遺物に記された文字資料のうち最も長文のものは、ファイアンス製の三角柱の 3 面に刻まれたもので 26 字を数える (図 3)。1 面に記されたもののうち最も長いのは、四角い印章に 3 行にわたって記された 17 字 (Joshi & Parpola, M-314)、1 行で最長のもは 14 字である。最短の文字資料は 1 字のもので、全体を平均すると、文字資料の平均字数は 5 字ということになる。全体でいくつの異なった文字があるかという字母数は、どれを 1 つの文字 (字母) と考えるかによって異なる。すなわち、似たようなものうち、どれを同じ字母の異字体とし、どれを独立した字母と考える

図 2 ドーラヴィーラーで発見された文字



図 3 三角柱に刻まれた文字



M-494 A



M-494 B-G



M-494 F

出典: Joshi & Parpola (eds.) (1987).

か、あるいは、どれを合字とし、どれを独立の字母とするかによって、字母の数が異なってくるからである。パルポラは字母数を 385 とし、同じく著名な研究者であるマハーデーヴァン (I. Mahadevan) は 417 としている。たとえば、100 以下のように、もっと少なく考える研究者もいないではないが、研究に大きな成果を上げているロシアの研究者 (代表はクノロゾフ Ю. В. Кнорозов, Yu. V. Knorozov) も 300 以上の字母を数えており、近年主流の考えは、400 近い字母があるとするものである。

【文字の種類と特徴】 次に、仮に字母が 300~400 とすると、それだけの数をもつ字の種類はどのようなものと考えられるのであろうか。問題は、表意文字か表音文字かということになるのだが、300~400 という数は、表意文字にしては少なく、表音文字には多すぎるために、多くの研究者はそれを、表意・表音 (logosyllabic) 文字と考えている。すなわち、表意文字の段階から、すでにいくつかの文字は表音文字へと使われだした、表